母子に対する栄養指導の指針策定に関する研究

高橋悦二郎[1)]，水野　清子[2)]，染谷　理絵[2)]，鍵　　孝恵[2)]
小倉　弘子[3)]，小野恵津子[4)]，笹川　祥美[5)]，佐々木くに子[6)]
鶴見田鶴子[7)]，藤沢　良知[8)]，藤田　一美[9)]，堀口　育子[10)]

要約：

母子栄養指導の充実・向上を図るための指針策定に当り、5カ月～14カ月児4634名を対象に、栄養・食生活実態調査を行い、昭和55年に発表された「離乳の基本」の検討を試みた。

① 離乳の進行にはかなりの幅で個人差が観察された。② 離乳食作りに対し消極的姿勢を示す母親が約半数弱に観察され、このような姿勢は離乳の進行にかなりの影響を及ぼしていた。③ 食行動の発達を津守らのデータ（昭和45年）と比較すると、本対象に遅延傾向が観察された。しかし、離乳食作りに母親が積極的姿勢を示す場合に、食行動の発達は促される傾向にあった。④ ベビーフード（ＢＦ）がかなりの頻度で使用されており、特に、専業主婦、離乳食作りに消極的な者にその傾向が強かった。⑤ ＢＦを9カ月以降に頻回に用いている者に離乳の遅延傾向が観察され、また、離乳の進行に問題を持つ者に使用頻度が高かった。⑥ 5、6カ月児及び8カ月児以降の咀しゃくの発達状況は「離乳の基本」に示されているものをかなり上回る者が多く、ＢＦの使用頻度や母親の食意識も咀しゃくの発達に影響を及ぼしていた。⑦ 離乳に関する情報は比較的よく入手されていたが、その入手先として保健所・市町村、病院の専門職をあげる者は約半数に過ぎなかった。⑧ 情報入手の度合の低い者、専門職以外から情報を得る者は離乳進行上問題のみられる者が多かった。

以上の結果から、ＢＦの適正な利用法、咀しゃくの発達を加味して、離乳完了期（11カ月～14カ月）を設定した離乳の進行例、食行動の発達を配慮した食事の与え方、栄養指導の方法などを包含した新しい離乳指導指針の策定の必要性が示唆された。

見出し語：母親の離乳食意識、離乳の進行、ベビーフード、食行動、咀しゃく、離乳の情報源

1)女子栄養大学，2)日本総合愛育研究所，3)江戸川保健所，4)杉並東保健所，5)鎌倉保健所
6)仙南保健所，7)東村山保健所，8)実践女子短期大学，9)兵庫県保健環境部，10)麻生保健所

研究目的：

昭和55年に厚生省離乳食幼児食研究班により「離乳の基本」[1]が発表されて以来、これを基に各地保健所、市町村及び相談施設において、それぞれの地域に即した離乳指導が展開され、母子栄養指導に果たした「離乳の基本」の役割は甚だ大きいといえよう。しかし、家族形態、母親の就業状況や食生活に対する意識などが変化してきている今日、全国の保健所及び市町村において、乳幼児健診に携わる医師、栄養指導担当者を対象としたアンケート調査[2]によると、医師の38%、栄養指導担当者の48%の者は新しい離乳基準の作成を望んでいた。そこで、平成２年度に全国的規模で離乳期乳児の栄養・食生活に関する実態調査を行い、本年度は昨年度に続きその検討資料の作成を行った。

調査対象及び調査方法：

宮城県、埼玉県、東京都、神奈川県、愛知県、兵庫県及び福岡県に居住する5カ月～14カ月児を持つ母親を対象に、離乳の進行状況及び進行上の問題、離乳食作りに対する母親の姿勢、ベビーフードの使用実態、食行動の発達状況、栄養摂取量、乳汁及び離乳食に関する情報の入手などについてのアンケート調査を実施した。

調査期間は1990年10月～12月である。各地域における調査対象数を表１に示す。宮城県、東京都の一部、神奈川県及び兵庫県はそれぞれの保健所を通し、埼玉県、東京都の一部、愛知県及び福岡県はそれぞれの相談施設を通して調査を依頼した。

結果及び考察：

１．母親の離乳食作りに対する姿勢と児の離乳の進行状況に及ぼす影響

近年、若い母親の食事作りに対する意識が低下していると言われている。昭和62年度の国民栄養調査成績[3]により20歳代、30歳代の育児に携わっていると思われる女性の食事に対する意識をみると、「よく考えて食べる者」は前者16.4%、後者25.8%、また、「あまり意識していない者」はそれぞれ29.1%、19.4%で、若い女性の食意識は決して望ましい状態とはいえない。

そこで、このような状況が離乳食作りにどのような影響を及ぼしているかを調査した。その結果を表２に示す。全平均でみると、離乳食作りを特に負担に思っていない母親は44.4%、「離乳食を作るのは楽しい」という積極的姿勢を示す者は18.5%にみられるが、「離乳食を考えるのが煩わしい」「考えるのが面倒」という消極的姿勢の者は、それぞれ14.8%、32.6%に観察された。月齢の進行と共に「作るのは楽しい」という者の割合は次第に減少し、一方、「考えるのが煩わしい」「考えるのが面倒」という者の割合は増加している。これは離乳の進行に伴って食事回数が増えるために、食事作りが負担になっていくのであろう。

そこで、母親の離乳食作りに対する姿勢を積極群（作るのは楽しい）と消極群（考えるのが煩わしい、考えるのが面倒）とに分けて、離乳食の進行状況、特に「離乳は順調に進んでいる」「喜んで離乳食を食べる」の項目を中心に、これらに及ぼす母親の姿勢の影響を観察してみた。表３からも明かなように、いずれの月齢におい

ても、「離乳は順調に進んでいる」「喜んで離乳食を食べる」者の割合は、離乳食作りに対し積極的姿勢を示す母親に有意に高い。

２．母親の離乳食作りに対する姿勢と児の食行動の発達との関係

津守ら[4]の乳幼児精神発達調査の中から、5～14カ月児に該当する食行動14項目を取り上げ、さらに「スプーンから食べることができる」「哺乳瓶を自分で持って飲む」の２項目を追加して、本対象の食行動の発達状況を調査し、津守らのデータとの比較を試みた。各月齢における各項目の通過率を表４に示す。

5カ月児において、乳を飲むときに乳のみに気を奪われていた状態から脱し、外界に対する関心が現れてくる行動、即ち、「乳を飲むときに、哺乳瓶や乳房に手を触れている」「乳を飲みながらあたりをみたり、声を出したりして遊ぶ」行動は津守らのデータに比べ、本対象の通過率はそれぞれ5%、19%低い。「スプーンで飲むことができる」割合も5～10カ月を通して、津守らの値に比べ5～10%低率であった。5、6カ月から10カ月、項目によっては12カ月にわたって、津守らの値に比べ本対象の通過率が低かった行動として、「満腹になると哺乳瓶を手で払いのける」「支えればコップから上手に飲む」「茶碗などを両手で持って口に持っていく」「コップを自分で持って飲む」、また、7カ月から低率を示したものに、「哺乳瓶や食物をみると嬉しそうにする」「スプーンを保育者の手から取りあげて、自分の口に持っていこうとする」「食卓をかきまわす」があげられ、11～12カ月時に差がみられた行動として、「自分でスプーンを持ち、すくって食べようとする」「マンマといって食事の催促をする」で、これらも本対象の通過率が低かった。一方、本対象の通過率が高かった行動として、「他の人が食べているのを見て欲しがる」（7～10カ月）、また、両群間に殆ど差がみられなかったものに「ビスケットなどを自分で持って食べる」があげられた。このように本対象の食行動の発達が、総体的に見て津守らの結果に比べ遅い傾向が観察された。そこで、前述の離乳食作りに対する母親の姿勢と食行動の発達との関連づけを行った。取り上げた16種の食行動の中、いずれの月齢においても、大部分の食行動の発達に母親の離乳食作りに対する姿勢が関与していた。その中で、特に有意性が観察されたもの9項目についての結果を表５に示す。離乳食作りに母親が積極的姿勢を示すと、5～6カ月児では9項目中4項目に、7～8カ月児3項目、9～10カ月児4項目、11～14カ月児3項目の食行動の発達が有意に早い。しかし、「食卓をかきまわす」行動は、いずれの月齢においても消極群の母親の児が積極群に比べ早かった。これは消極群の児は積極群の児に比べ、「食欲がむら」「あまり食べない」という訴えが多く、そのために食事中、食べることに集中できず、このような結果になったものと思われる。

３．ベビーフードの使用状況と離乳食作りに対する母親の姿勢

ここ数年来、多種類のベビーフード（ＢＦと略称）が次々に製造されている。これらの製品を母親達がどの程度利用し、また、どのように受け止めているかを調査した。5～8カ月児を持つ母親の40%前後の者は、1週間に3～4回ないし

殆ど毎日ＢＦを用いており、9カ月以降においても11～21%の母親は週に3回以上ＢＦを使っていた。ＢＦを利用する理由として、いずれの月齢の母親もＢＦの便利性をあげており、また、離乳食献立の変化や栄養のバランスをとる手段として利用する者も多い。「離乳の基本」が作成される際に行われたＢＦの使用状況調査成績[1]と比較すると、使用する理由は多少異なっており、時代と共にＢＦに対する母親の意識の変化が伺える。

表２に示した離乳食作りに対する母親の姿勢とＢＦの使用状況との関連づけを行い、その結果を表６に示す。5カ月から10カ月にかけて、消極群の母親は、積極群の者に比べ、ＢＦを「週3～4回」及び「殆ど毎日使う、全部」という者の割合が有意に高い。1歳前後になると家族の食事の導入がかなり可能になるが、離乳食作りが煩雑な離乳初期から後期にかけては、消極的な姿勢をもつ母親には、離乳食作りが相当負担になっているのであろう。

さらに、ＢＦを使用する背景を、母親の職業、家族形態、児の続柄の視点から観察した。対象の全平均値でみると、ＢＦを「殆ど使わぬ・たまに使う」者はフルタイムの母親では54.9%、パート・家業に従事する者、44.8%、専業主婦、41.4%、一方、「殆ど毎日・全部」ＢＦという者はフルタイムの母親に比べ、パート・家業、専業主婦に有意に高い（図１）。月齢別にみると、このような傾向は5～6カ月、7～8カ月、9～10カ月時に現れており、特に5～6カ月、7～8カ月時に有意性が観察された。このような現象はフルタイムの母親はパート・家業に従事する者に比べ、児を保育所に預けている者が多く、離乳食の供与が保育所で行われていること、また、専業主婦に比べ、フルタイムの者は多忙な中にも離乳食を手作りするなど、短時間で濃厚な育児を心がけているのかも知れない。さらに家族形態別にみると、複合家族の母親に比べ、核家族の場合にＢＦの使用頻度が有意に高く、また、第１子の場合は第２子以上の者に比べ、ＢＦを頻回に使う割合が高い。このような傾向は全期間において観察されており、特に7～8カ月、9～10カ月時において有意であった。現代の母親は離乳食作りに不慣れ、または、不安な部分をＢＦによりカバーしているのかも知れない。

４．ＢＦの使用状況と離乳の進行

離乳の進行状況を離乳食の回数から観察してみた。「離乳の基本」[1]によると、食事回数は5カ月1回、6カ月から2回、9カ月から3回としている。本対象の実態をみると、約半数から2/3の者はこれに準じていた。ＢＦの使用状況と食事回数との関連を表７に示す。5～6カ月、7～8カ月の時点では「殆ど毎日・全部」という者は、「殆ど使わぬ・たまに」に比べ、「離乳の基本」[1]に準じている割合が有意に高い。しかし、9カ月以降になると「殆ど使わぬ・たまに」に比べ、「殆ど毎日・全部」の者では「離乳の基本」[1]に準じている者の割合が有意に低く、1､2回食の者が9～10カ月で約20%、11～14カ月においても7.5%に観察され、離乳の遅延傾向が観察された。

離乳の全般的な進行状況を「大体順調に進んでいる」者と、「現在困っている」者とに大別してＢＦの使用状況との関連づけを行ったところ、5～6カ月児では「大体順調」という者の方

がＢＦの使用頻度が幾分高い。しかし、7～10カ月児では、現在、離乳に関するトラブルを持つ者にその使用頻度は有意に高いが、両群のトラブルの内容とＢＦの使用状況との間には、何らの関係も見出されない。

５．咀しゃくの実態

近頃、幼児期になって硬いものがかめない、かまずに飲み込む、口の中に食物をためて飲み込めないなど、食物の咀しゃくに関する問題が取り上げられている。この原因として離乳食の進め方…特に調理形態…があげられている。そこで本調査の対象児がそれぞれの月齢において、どの程度の形態の食物を受容しているかを調査し、「離乳の基本」[1]に示されているものとの比較を試みた。「離乳の基本」[1]によると、5～6カ月頃では「ドロドロ状」、7～8カ月頃「舌でつぶせる硬さ」、9～11カ月頃「歯ぐきでつぶせる硬さ」としているが、私達は日常の栄養指導の経験から、1歳前後に「幼児食に近い硬さ」という項目の必要性を感じており、今回、それを付加して調査した。図２に示したように、「離乳の基本」[1]に大方沿っている者の割合は、5カ月児44.1%、6カ月児16.9%、7カ月児65.7%、8カ月児34.7%、9カ月児49.1%、10カ月39.3%、11カ月20.7%で、特に5～6カ月、8カ月以降において離乳食の調理形態の進み方が早い傾向にあった。しかし、9～10カ月児、11～14カ月児においても10%前後の者は「ドロドロ状」の食物が与えられており、これは咀しゃくの発達を促す点からも注目に値する。

そこで、咀しゃくの発達と離乳開始月齢との関係を観察した。表８からも明らかなように、4カ月未満に離乳を開始した場合、咀しゃくの面では殆ど差はみられないが、咀しゃくの状況が「離乳の基本」[1]に示されている状況よりも遅い者（「基準以下」）は「ほぼ基準」または、「基準以上」の群に比べ、6～7カ月に離乳を開始する割合が高く、逆に「基準以上」の者は4カ月に開始する者が多かった。

次に、ＢＦの使用状況と咀しゃくとの関連づけを試み、その結果を表９に示す。5～6カ月においてＢＦの使用頻度が「殆ど毎日・全部」という者は「殆ど使わぬ・たまに」という者に比べ、調理形態が「ほぼ基準」という者の割合が高く、手作り中心で離乳を進めている場合には、「基準以上」の者の比率が有意に高い。7～8カ月、9～10カ月においても、5～6カ月の場合と同様に、手作り中心の場合に児の咀しゃくの発達が有意に早く、特に9～10カ月の時点で食事の殆どをＢＦに依存している者では、「基準以下」に属する者が有意に多い。

現在、歯科保健の立場から、小児の歯周疾患と食物の硬さとの関係が論じられている。即ち、幼児期に歯肉に炎症を有するグループでは、いわゆる「やわらか食品」を嗜好する傾向にあるという[5]。離乳後期にＢＦをよく用いる者が幼児期になって「やわらか嗜好」に進むか否かについては、今後の検討を待たなければならない。しかし、離乳後期にＢＦの使用頻度の高い者は他のグループに比べ、離乳食の調理形態が「基準以下」の者の割合が高いという事実から、この時期のＢＦに対する適正な指導とこの時期向きに開発されているＢＦの硬さを再検討する必要があるのかも知れない。

次に児の咀しゃくの発達と離乳食作りに対する母親の姿勢との関連づけを試みた。図３に示すように、「考えるのが面倒・煩わしい」者では、咀しゃくの段階が「基準以上」の者に比べ、「基準以下」「ほぼ基準」の割合が高く、「作る時間がない」者では「基準以下」の割合が、また、「作るのは楽しい」者では「基準以上」の割合が高かった。離乳食作りに対して母親が積極的な姿勢を示すことは、手作りの離乳食が中心となり、その結果、咀しゃくの発達を促すのであろう。

６．離乳に関する情報の入手状況と離乳の進行との関連性

離乳食に関する情報の入手状況を表１０に示す。情報を入手する機会がよくある、あるいは時々あるとする者がそれぞれ21%、73%、機会のない者は5%で月齢差は殆ど見られない。情報の入手先を複数回答で調べ、健診制度及び専門職種による差異を観察するために表１０の脚注に示すように分類した。その結果、機関別には、公的あるいは医療機関をあげるものは約半数に過ぎない。しかし、これらの比率は月齢と共にやや増加し、周囲の者・マスメディアをあげる者は減少傾向を示す。専門職種別にみると、栄養士による者が約3/1と最も多いが、医師あるいは保健婦のみの者は合わせて42%に及び、月齢差は殆ど見られない。

各機関別にあげられている職種を見ると、公的機関では保健婦をあげる者が多く40%、公的＋医療機関では栄養士＋保健婦など栄養士を含む複数をあげるものが多く25～15%、医療機関では栄養士、医師をあげるものが多くそれぞれ44%、30%と機関により明かな違いがみられた（$p<0.001$ ）。

情報入手の度合と情報源との関連を、機関別にみると、度合の高い者は、公的＋医療機関、医療機関の比率が、度合の低い者は周囲の者・マスメディアの比率がそれぞれ高い（$p<0.001$）。職種別には、度合の高い者は複数の職種から情報を得る比率が、度合の低い者は単独の職種の比率がそれぞれ高い（$p<0.001$）。

これらと離乳の実態の関連をみると、表１１のようで、情報入手の度合の低い者は摂食リズムが不定で、食事回数が離乳の基本の指示に準じておらず、むら食い、あまり食べないという主訴をもつ者が多い。また、離乳食として大人の食事をそのまま、同じ味付けで与える者や、ベビーフードの使用頻度の高い者が多く、離乳食作りを負担に感じる者が多かった。

さらに、情報源別にみると、機関別には（表１１）、周囲の者・マスメディアをあげる者は摂食リズムが不定で、離乳食作りを負担に感じる者が多く、公的機関をあげる者も同様の傾向が認められた。一方、医療機関をあげる者は公的機関をあげる者に比べ、ベビーフードの使用頻度の高い者が多かった。また、情報を医師や保健婦から得る者は、摂食リズムが不定の者が多く、ベビーフードの使用頻度の高い者や、逆に殆ど使用しない者が多かった。

次に、情報の実行状況をみると、実行する者は55%、1/3の者は役立つが実行しにくいといい、1/10の者は実行しないことが多いという。入手した情報に迷わされる者が8%にみられた。

また、入手した情報を実行しにくいあるいは

実行しないとする者、迷わされる者は離乳の実態に何らかの問題を持つ者が多かった。

情報源別に実行状況をみると（図４）、機関別には、医療機関、公的＋医療機関から情報を得る者は実行しやすく、周囲の者・マスメディア、公的機関では実行しにくいとする者、実行しない者が多かった。また、職種別には、医師＋栄養士＋保健婦をあげる者に、実行しやすい者が多く、保健婦、栄養士＋保健婦による者は実行しにくい者が多かった。また、医師＋栄養士による者は迷わされる者が多かった。

今後、より多くの児に適切な離乳が行われるためには、健診、保健指導の場における情報の提供方法を今一度考え直す必要があるように思われる。価値観やライフスタイルが多様化する今日、どのような状況下にある母親にも、それぞれに適切な情報を提供し、何よりもそれを実行してもらうためには、相談機関の窓口と住民との距離を一層縮め、個々の状況に合ったきめ細かい適切な相談体制の確立が望まれる。同時に専門職の教育体制の強化が必要であろう。

文献：

１）今村栄一編著：「離乳の基本」離乳食幼児食研究班報告と解説、医歯薬出版（株）、1981年

２）水野清子他：乳幼児の栄養・食生活指導に関する研究、日本愛育研究所紀要　第27集、p.91、1991年

３）厚生省保健医療局健康増進栄養課監修：国民栄養の現状、第一出版（株）、1989年

４）津守　真他：乳幼児精神発達診断法、0～1歳まで、大日本図書、1970年

５）赤坂守人他：歯科疾患予防に関わる食習慣に関する研究、厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」、平成２年度研究報告書、1991年

表１　調査対象数

（人）

	全体	5～6月	7～8月	9～10月	11～12月
宮　城	690	167	186	168	169
埼　玉	216	47	61	58	50
東　京	1460	375	363	331	391
神奈川	1224	280	419	393	132
愛　知	270	68	74	63	65
兵　庫	608	254	166	138	50
福　岡	166	49	37	40	40
	4634	1240	1306	1191	897

表２　離乳食作りに対する母親の姿勢

（%）

	全体	5～6カ月	7～8カ月	9～10カ月	11～14カ月
特になんということもない	44.4	44.2	42.4	43.2	49.0
作るのは楽しい	18.5	24.1	19.8	16.3	11.9
作る時間がない	11.8	12.4	12.4	11.4	10.6
考えるのが煩わしい	14.8	13.1	14.8	15.6	16.3
考えるのが面倒	32.6	26.4	33.8	37.4	33.0
その他	7.8	7.1	7.4	9.1	7.6

表３　離乳食作りに対する母親の姿勢と離乳の進行

	5～6カ月	7～8カ月	9～10カ月	11～12カ月
離乳は順調に進んでいる	＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊
喜んで離乳食を食べる	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊

＊　P＜0.05　　＊＊　P＜0.01　　＊＊＊　P＜0.001

表4　食行動の通過率

（%）

	5ヵ月	6ヵ月	7ヵ月	8ヵ月	9ヵ月	10ヵ月	11ヵ月	12ヵ月	13ヵ月	14ヵ月
乳を飲む時、哺乳瓶や乳房に手を触れている	89.0	86.7	82.4	80.0	72.6	68.6	53.3	43.4	48.9	31.7
乳を飲みながら、あたりをみたり、声をだしたりして遊ぶ	72.4	68.0	60.5	53.6	42.7	42.0	29.7	26.1	29.2	24.4
スプーンから飲むことができる	89.6	88.1	91.1	90.0	89.0	86.0	81.7	78.4	74.2	68.3
スプーンから食べることができる	92.6	95.6	97.0	96.9	95.9	94.3	90.2	86.6	85.4	78.0
満腹になると、哺乳瓶を手ではらいのける	58.3	56.4	62.5	67.2	69.8	72.6	61.4	54.4	51.1	46.3
哺乳瓶や食べ物をみると、嬉しそうにする	81.0	85.3	87.8	89.1	91.5	88.0	87.0	84.2	88.2	65.9
ビスケットなどを自分でもって食べる	30.7	61.0	82.0	92.3	93.0	97.3	97.6	96.4	98.9	97.6
支えればコップから上手に飲む	17.2	26.9	38.6	49.4	54.3	67.8	74.4	78.7	78.1	80.5
スプーンを保育者の手から取り上げて、自分の口にもっていこうとする	43.6	57.6	66.3	65.6	66.3	70.2	74.8	78.9	87.1	85.4
食卓をかきまわす	16.0	36.8	54.7	68.3	74.6	77.3	82.5	80.8	86.5	75.6
他の人が食べているのを見て欲しがる	65.0	78.8	86.5	89.1	93.7	92.9	93.5	92.3	95.5	92.7
茶碗などを両手でもって、口にもっていく	16.6	26.1	33.3	39.5	44.6	51.4	56.1	68.1	79.2	82.9
哺乳瓶を自分でもって飲む	25.2	33.1	47.4	52.5	60.0	66.1	66.3	60.7	61.8	58.5
コップを自分でもって飲む	1.2	3.4	4.5	6.7	11.6	16.9	30.9	40.5	57.9	46.3
自分でスプーンをもち、すくって食べようとする	0.6	3.4	4.7	8.4	14.2	23.8	46.3	59.0	76.4	78.0
「マンマ」といって、食事の催促をする	3.1	5.2	12.3	20.9	34.8	50.5	58.5	60.0	69.7	68.3

表5　離乳食作りに対する母親の姿勢と児の食行動

	5～6カ月	7～8カ月	9～10カ月	11～14カ月
スプーンから飲むことができる	**	*		
スプーンから食べることができる				*
哺乳瓶または食物をみると喜ぶ	**	*		
支えればコップから上手に飲む			*	
茶碗などを両手でもって、口にもっていく			**	
哺乳瓶を自分でもって飲む	*			
コップを自分でもって飲む		*	*	**
自分でスプーンを持ち、すくって食べようとする				*
「マンマ」といって、食事の催促をする	***		**	

* P<0.05　** P<0.01　*** P<0.001

表6　離乳食作りに対する母親の姿勢とベビーフードの使用状況

(%)

月齢	離乳食作り	殆ど使わぬ たまに	1～2回/週	3～4回/週	殆ど毎日 全部	χ^2検定
5～6	考えるのが面倒・煩わしい	23.0	23.2	18.6	35.2	
	時間がない	26.6	21.3	14.7	37.4	p<0.001
	楽しい	35.0	28.7	13.7	22.6	
7～8	考えるのが面倒・煩わしい	26.8	30.4	20.6	22.2	
	時間がない	23.7	26.9	20.5	28.9	p<0.05
	楽しい	29.7	33.0	23.3	14.0	
9～10	考えるのが面倒・煩わしい	42.1	32.1	16.0	9.8	
	時間がない	30.8	31.5	15.4	22.3	p<0.001
	楽しい	50.6	28.7	10.6	10.1	
11～14	考えるのが面倒・煩わしい	59.3	25.5	10.2	5.0	
	時間がない	59.3	23.1	12.1	5.5	n.s.
	楽しい	64.0	27.2	3.9	4.9	

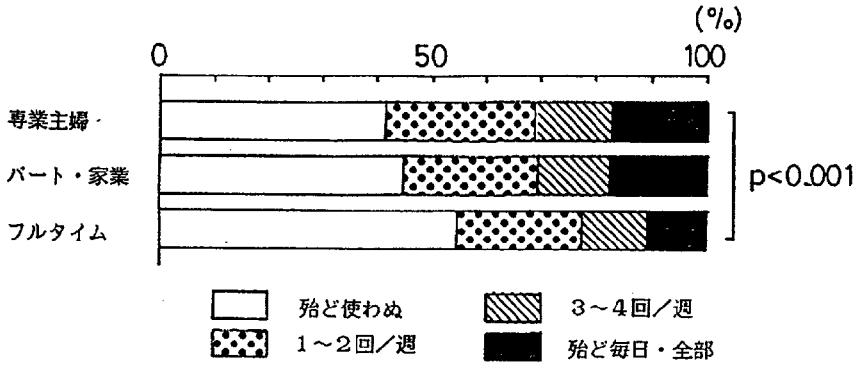

図1　母親の職業とベビーフードの使用状況

表７　離乳食の回数とベビーフードの使用状況

（%）

月齢	使用状況	1回	1～2回	2回	2～3回	3回	4回以上	χ^2検定
5	殆ど使わぬ・たまに	28.1	27.5	27.8	12.9	3.4	0.3	
～	1～2回／週	28.6	22.4	36.2	8.9	3.9	0	p<0.05
6	3～4回／週	24.8	29.1	38.2	6.9	1.0	0	
	殆ど毎日・全部	26.6	28.9	35.9	7.2	1.4	0	
7	殆ど使わぬ・たまに	2.7	11.4	37.4	31.4	15.6	1.5	
～	1～2回／週	1.6	8.6	58.3	21.8	9.4	0.3	p<0.001
8	3～4回／週	1.7	12.6	53.2	22.5	9.5	0.4	
	殆ど毎日・全部	3.9	11.8	58.7	17.3	7.5	0.8	
9	殆ど使わぬ・たまに	0.5	1.0	4.7	20.7	71.0	2.1	
～	1～2回／週	0.6	1.5	9.4	20.2	67.2	1.1	p<0.005
10	3～4回／週	0	2.3	7.5	27.8	60.2	2.2	
	殆ど毎日・全部	2.8	4.7	12.3	19.8	59.5	0.9	
11	殆ど使わぬ・たまに	0	0.2	0.5	8.3	86.0	5.0	
～	1～2回／週	0	0.6	0.6	8.3	87.8	2.7	p<0.01
14	3～4回／週	0	0	5.1	5.1	86.4	3.4	
	殆ど毎日・全部	0	2.5	5.0	12.5	77.5	2.5	

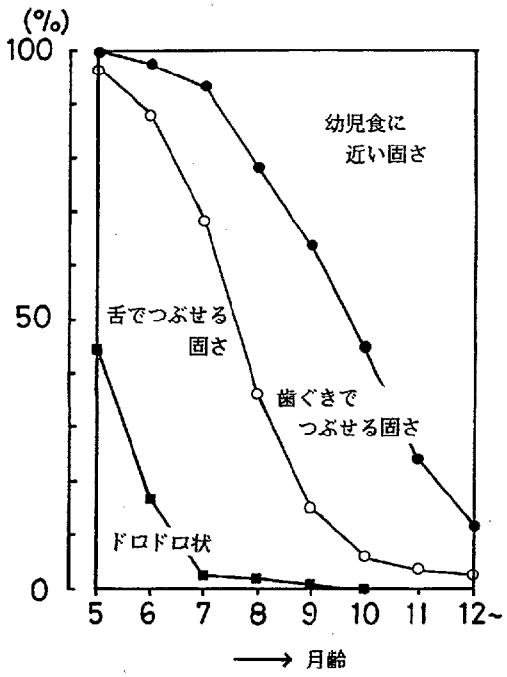

図２　月齢別にみた乳児の咀しゃく状況

表８　咀しゃくの発達と離乳開始月齢

（%）

咀しゃく	4カ月未満	4カ月	5カ月	6カ月	7カ月以降
基準以下	8.7	20.5	39.0	20.8	11.0
ほぼ基準	8.0	27.8	47.6	12.6	4.0
基準以上	9.8	35.0	45.0	8.1	2.1

表9　ベビーフードの使用状況と咀しゃく

（%）

月齢	使用状況	基準以下	ほぼ基準	基準以上	χ^2検定
5	殆ど使わぬ・たまに	0	19.4	80.6	
～	1～2回／週	0	17.2	82.8	p<0.01
6	3～4回／週	0	16.5	83.5	
	殆ど毎日・全部	0	26.8	73.2	
7	殆ど使わぬ・たまに	2.2	39.3	58.5	
～	1～2回／週	1.3	54.6	44.1	p<0.001
8	3～4回／週	0	58.5	41.5	
	殆ど毎日・全部	3.5	66.7	29.8	
9	殆ど使わぬ・たまに	6.9	40.5	52.6	
～	1～2回／週	10.9	46.0	43.1	p<0.001
10	3～4回／週	12.1	48.5	39.4	
	殆ど毎日・全部	25.2	48.6	26.2	
11	殆ど使わぬ・たまに	1.0	99.0	0	
～	1～2回／週	2.2	97.8	0	p<0.005
14	3～4回／週	11.8	88.2	0	
	殆ど毎日・全部	4.3	95.7	0	

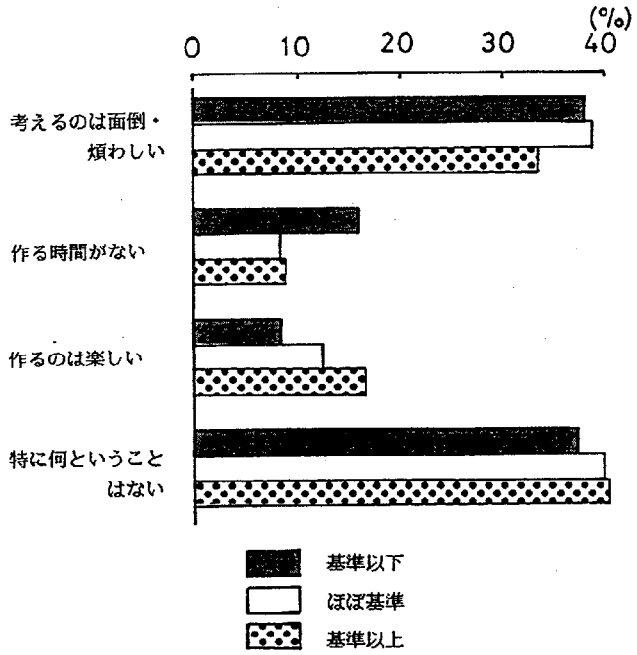

図3　離乳食作りに対する母親の姿勢と咀しゃくの発達

表１０　離乳食に関する情報の入手状況

(%)

			全体	5-6ヵ月	7-8ヵ月	9-10ヵ月	11-14ヵ月
入手		機会がよくある	21.2	21.4	20.4	22.3	20.7
		機会が時々ある	73.4	73.4	74.2	72.5	73.4
		機会がない	5.4	5.2	5.4	5.1	5.9
情報源	機関別	公的機関[1]	28.9	27.6	30.2	28.5	29.1
		公的＋医療機関[2]	8.8	8.5	9.2	8.5	9.3
		医療機関[3]	15.5	13.7	14.8	15.5	19.0
		周囲の者・マスメディア[4]	46.8	50.2	45.8	47.5	42.6
	専門職種別	医師	13.8	11.9	14.4	15.2	13.6
		栄養士	31.9	31.6	32.4	32.5	30.6
		保健婦	24.2	26.9	22.3	22.8	25.2
		医師＋栄養士	5.1	5.1	5.2	5.0	5.0
		医師＋保健婦	3.8	5.1	3.0	4.1	3.0
		栄養士＋保健婦	16.0	15.0	17.9	14.7	16.1
		医師＋栄養士＋保健婦	5.3	4.5	4.7	5.7	6.4

1)　保健所・市町村を中心とした専門職によるもの
2)　保健所・市町村及び病院を中心とした専門職によるもの
3)　病院を中心とした専門職によるもの
4)　友人・親・姉妹，本・育児書，雑誌，テレビ等によるもの

表１１　情報の入手状況と離乳の実態

(%)

		離乳の進行				離乳食調理			親の姿勢
		摂食リズム不定	現在問題が有る	じ離な乳いの食基事本回に数準	あむまら り食食い べない	大人と同じ調理	大人と同じ調味	殆どビ毎日フ全ド部	面離倒乳・食煩作わりしはい
入手	機会がよくある	6.3***	15.3	17.1**	12.0**	8.7***	8.4***	17.2***	30.6***
	機会が時々ある	10.4	16.7	22.2	15.3	9.2	13.0	16.2	39.0
	機会がない	15.3	17.3	25.5	16.2	18.1	18.5	20.7	34.9
情報源関別	公的機関	9.5**	16.5	21.4	14.0	8.7	11.0	13.9***	35.9***
	公的＋医療機関	5.3	16.2	19.3	15.9	8.9	15.1	16.0	32.9
	医療機関	7.7	17.0	17.6	13.9	9.9	11.8	21.1	32.1
	周囲の者・マスメディア	11.2	16.1	22.2	14.8	8.8	12.0	16.6	39.4

*:$p<0.05$, **:$p<0.01$, ***:$p<0.001$

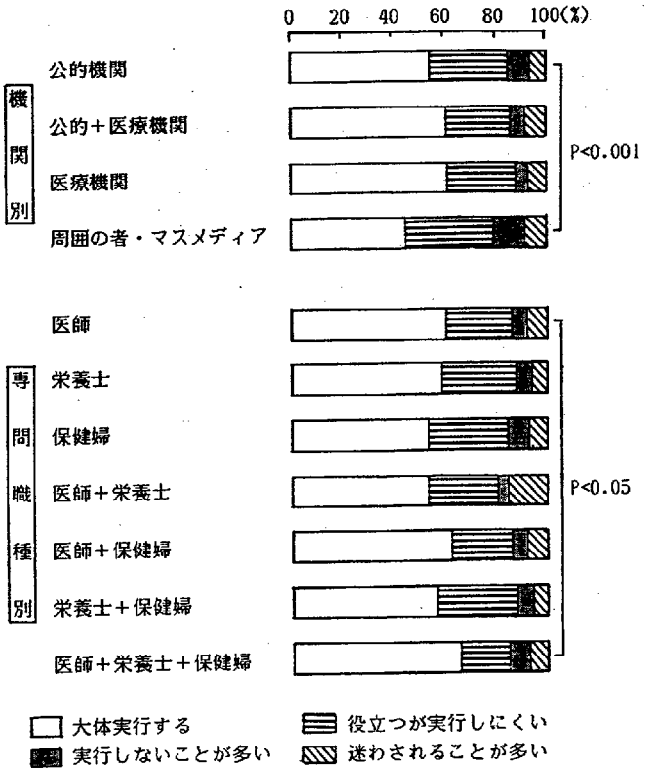

図4　情報の入手先と実行状況

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:
母子栄養指導の充実・向上を図るための指針策定に当り、5ヵ月～14ヵ月児4634名を対象に、栄養・食生活実態調査を行い、昭和55年に発表された「離乳の基本」の検討を試みた。①離乳の進行にはかなりの幅で個人差が観察された。②離乳食作りに対し消極的姿勢を示す母親が約半数弱に観察され、このような姿勢は離乳の進行にかなりの影響を及ぼしていた。③食行動の発達を津守らのデータ(昭和45年)と比較すると、本対象に遅延傾向が観察された。しかし、離乳食作りに母親が積極的姿勢を示す場合に、食行動の発達は促される傾向にあった。④ベビーフード(BF)がかなりの頻度で使用されており、特に、専業主婦、離乳食作りに消極的な者にその傾向が強かった。⑤BFを9ヵ月以降に頻回に用いている者に離乳の遅延傾向が観察され、また、離乳の進行に問題を持つ者に使用頻度が高かった。⑥5、6ヵ月児及び8ヵ月児以降の咀しゃくの発達状況は「離乳の基本」に示されているものをかなり上回る者が多く、BFの使用頻度や母親の食意識も咀しゃくの発達に影響を及ぼしていた。⑦離乳に関する情報は比較的よく入手されていたが、その入手先として保健所・市町村、病院の専門職をあげる者は約半数に過ぎなかった。⑧情報入手の度合の低い者・専門職以外から情報を得る者は離乳進行上問題のみられる者が多かった。以上の結果から、BFの適正な利用法、咀しゃくの発達を加味して、離乳完了期(11ヵ月～14カ月)を設定した離乳の進行例、食行動の発達を配慮した食事の与え方、栄養指導の方法などを包含した新しい離乳指導指針の策定の必要性が示唆された。